開催地名	岐阜県富加町
開催日時	令和７年 10 月 26 日（日）　9:45　～　10:45
開催場所	岐阜医療科学大学関キャンパス
語り部	松井　憲（広島県広島市）
参加者	74 名
開催経緯	10 月 26 日は富加町大平賀地区の防災訓練の日である。地区の方々に臨時避難所の場所を知ってもらうために実際に岐阜医療科学大学関キャンパスに避難してもらった。また 2014 年に起きた広島豪雨災害で被災され、ご自宅が 10 日間土砂に埋まるという経験をした松井さんにお話を聞き、災害が起こった時に実際にどのように避難していくのがいいのかというのを学ぶ機会を作った。
内容	（１）　広島土砂災害の概要 2014 年 8 月 20 日未明、広島市安佐南区・安佐北区を中心に記録的な豪雨が襲った。特に梅林地区や八木地区では 1 時間に 87 ミリ、24 時間で 247 ミリもの雨が降り山肌が次々と崩落。深夜の 2 時ごろ突発的に発生した土石流が住宅地を直撃した。この災害で 77 名が命を落とし、約 4700 棟の住宅が全壊・半壊する甚大な被害となった。 被害の特徴は、夜間に突発的に起こったことで住民が避難する時間がほとんどなかった点にある。警報が出なかったため、実際に避難をした人はごくわずかだった。激しい雨音や雷鳴に混じって、地鳴りのような轟音とともに土砂が住宅街を襲い、人々は暗闇の中で何が起きているのかもわからぬまま被災した。 災害後には、消防・自衛隊・警察が懸命に救助活動を行ったが、倒木や土砂で道路が寸断され、救出が難航した。 この災害をきっかけに、国では避難情報発信のタイミングや災害警戒区域指定の見直しが行われた。しかし、行政の対策だけでなく、地域住民が自ら命を守る意識を持つことの重要性が強く認識されるようになった。 （２）　講師自身と被災者の体験 講師自身もこの災害で自宅が被災し、10 日間にわたり家が土砂に埋もれたままの状態となった。夜は施設に身を寄せ、昼は行方不明者の捜索や片付け作業に従事した。復旧には 2 か月を要し、ようやく生活を再建できたが、心には深い傷が残ったという。いまでも雷や重機の音を聞くと当時の記憶がよみがえり、不安に襲われることがあると語った。 講師の周囲でも多くの悲劇が起きた。家族を失った人、自宅が一瞬で流された人、救出されたものの家を失い、避難所生活を余儀なくされた人もいた。それぞれが自責の念に苦しみ、心のケアが必要になった人も多いという。 講師は当時の経験を振り返り、「人は危険が迫っていても、すぐには逃げられない」と語った。夜中で周囲の状況が見えなかったこと、警報の発信が発災後になったことも避難の遅れにつながった。 また、災害後に心の傷を抱えた被災者の支援も重要であると強調した。災害の被害は建物や物だけでなく、人の心に長く影響を及ぼす。講師自身、当時の恐怖を乗り越えるまでに時間がかかったという。その経験から、現在は全国各地で防災講演を行い、「命を守る行動」について語り続けている。 （３）　教訓と今後の避難行動への活かし方 広島の災害から学ぶ最大の教訓は、「災害は必ず起きるもの」として備えること、そして「早く逃げる勇気」を持つことだ。行政が出す避難情報や警戒レベルを待っていては手遅れになることもある。警戒レベル 3 で高齢者等は避難、4

	で全員避難、5はすでに災害が発生している段階。講師は「レベル4を待たず、3の段階で動くのが命を守る行動だ」と訴える。 また、避難という言葉に抵抗を感じる人が多いことにも触れた。「逃げる」ではなく「行く」と言い換えることで、心理的なハードルを下げ、行動を促す工夫が必要だという。家族で避難のタイミングや集合場所をあらかじめ話し合っておくことも重要である。特に夜間や豪雨時には、避難経路が危険になることが多く、複数の経路を確認しておくことが求められる。 さらに、ハザードマップを定期的に確認し、3年ごとに見直すことも勧められた。自宅だけでなく、職場や学校、通学・通勤経路上にどんな危険があるのかを把握し、「自分と家族がどこで被災する可能性があるのか」を想定しておくことが大切だ。子どもが「怖い」「危ない」と感じたら、その感覚を軽視せず、一緒に避難行動に移ることが命を守る第一歩になる。 また、講師は「災害を自分ごととして考えることが何より大切」と繰り返し訴えた。多くの人は災害を他人事として捉えがちだが、災害はどこでも起こり得る。今回の講演が行われた岐阜県関市や富加町も、過去に土砂災害警戒区域が指定されており、同じような危険を抱えている地域である。過去の教訓を風化させず、地域全体で防災意識を高めることが、命を守る最大の備えとなる。 最後に講師は、「今日ここで学んだことを、来られなかった人にも伝えてほしい」と呼びかけた。災害の記憶を語り継ぎ、知識と経験を共有することが、地域の防災力を高め、未来の命を救うことにつながる。自分や家族の命を守る行動は、決して特別なことではなく、日常の小さな備えから始まる。広島の悲劇を無駄にしないためにも、「早めの行動」と「命を守る判断力」を地域全体で育てていくことが求められている。
開催地より	被害にあわないために大切なことがわかった。 実際に被災された方のお話を聞ける貴重な機会だった。